

特別寄稿

東医と順天堂と回生病院

佐藤 蕃(東京医科大学・昭和二十九年卒)

長 委三美先生が東医創学に向けて奔走された日々の記録を綴った手記が、このたび解読整理されて刊行の運びとなったことは、本学の歴史に貴重な資料を加えたものとして真に欣快の至りである。この実現に当たられた友田燁夫教授と本学歴史資料室関係の方々に対し深甚なる敬意と謝意を表する。

私が東医に入学したのは昭和二十五年四月、東京医科大学(旧制)の学部第二回生としてであった。私の家系は順天堂の創始者佐藤泰然に始まる医の家であつて、私の祖父佐藤佐(二代尚中三女の婿)が別家を構え、祖父も私の父や父の兄弟も順天堂に奉職して本家の業を支えて来た。

東医合格を父に報告した時「お前はよく知らないだろうが」と前置きして、東京医専と順天堂の浅からぬ関係や、順天堂第三代の佐藤進院長、第四代の佐藤達次郎院長が創立に深く関わり、特に佐藤達次郎が創学から校長を勤め、昭和十八年に緒方先生と交替するまで率先して学生の教育に当たつていたことなどを聞かされた。また当時の学長は緒方知三郎先生であり、先生が適塾の緒方洪庵の孫であることは知っていたが、その母系(三澤良益)をたどると泰然の曾孫になることはこの時はじめて知った。

余談ながら私が東医に入学した後、知人や同級生などから君はなぜ順天堂に進まなかったのだと尋ね

られた。順天堂大学には父や伯父叔父をはじめ縁戚の者が多数勤めていた。順天堂に入れば良しきにつけ悪しきにつけ佐藤一族がらみで評価されるのは必然である。私はそれをいさぎよしとせず敢えて順天堂を選ばなかったと豪語したものだだったが、東医との関係を知り、所詮は釈迦の手のひらに乗った孫悟空であったかと忸怩たる思いをしたものであった。

父に連れられて本家に達次郎先生(と家では呼んでいた)を訪ね入学の挨拶をした時のことである。もう八十二歳くらいであったか、あまり近しくしたことがない一族の大長老に「東京医大に入りました」というと、矍鑠とした老軀からざろりとした目が私にそそがれ、「うむ」と一言うなずいただけであった記憶がある。

東医建学の苦勞話や建学精神については当時の学生であった三輪新一、馬詰嘉吉、原三郎教授から「我々はストライキで学校を作ったんだ」と、折に触れ何度も聞かされたものであった。私のクラスは学部二回生のため緒方学長からも「君たちは次男坊クラスだからね」と評されたほどユニークで暴れん坊な学年であったらしく、先輩を見習うんだと称してクラスが結束し、基礎の時に一度、臨床で一度、某々教授をボイコットして物議をかもしながらも、学長方の苦笑いを誘ったことがある。

東医が開学した時、中濱東一郎先生所有の回生病院(麴町)が譲渡されて学生の研修病院となった。それが東大久保に移築されて大正七年五月に附属博濟病院として開院したのである。博濟病院は昭和三年に火災で焼失したので、回生病院が東医に貢献したのは僅か十年間に過ぎなかったが、東医の歴史を

語る上で、極めて重要な存在であったことは特筆されるべきである。

私が父から聞き、また薬理の授業の後にしばしば呼び止められて原三郎先生から聞かされたことは、東医の学生はお茶の水の順天堂医院に向向いての臨床研修もしたそうである。父は東大医学部の学生であったが休暇の時は内科担当の祖父や叔父に当たる大滝潤家ワスエ(佐藤尚中の末子)の診察の見学にいったらしく、原先生は「君のお父さんを見知っているが、君よりいい男だったな」と、冗談を飛ばされたものであった。

順天堂史上巻の大正時代の章に『大正七年に創立された東京医学専門学校の校長に佐藤達次郎が引張り出され、順天堂医院全体がその教育に協力する形を取るようになった。のちに東京医専の教授の多くが順天堂に何らかの形で関係あった人たちであったのは、これによるのである』と記されている。私の知るかぎりでは、小児科で後に学長となられた清水茂松、外科の佐藤清一郎(佐藤尚中の養孫)、内科の岩男督、耳鼻咽喉科の松本本松モトマツ(泰然の次男・松本順の嗣子)、眼科の井上誠夫の各教授方である。

平成十八年五月の維持会臨時総会で高山雅臣副会長がその閉会の言葉の中で、東医の創立に関わった三人の恩人がいると言及し、中濱東一郎、佐藤進、森林太郎(鷗外)の名を挙げられた。私はここに歴史と人の因縁の妙を覚え、会后高山先生に声をかけ、私が佐藤一族であること、中濱先生の孫の中濱博君(名古屋在住)と鷗外の孫森樊須君ハンズ(北海道在住)は共に学習院時代の同級生で今も親しい間柄であること、特に森樊須君の祖母で鷗外の最初の妻として長男の於菟氏を生んで直ぐに離縁された登志子夫人は

私の母方の大叔母に当たることを話した。高山先生も驚き、先日中濱先生のことでも未知の中濱博君に手紙を出したが、その非礼を私から詫びてもらいたいとのことであった。

そのことがきっかけで中濱君と電話で話をし、六月半ばに東京に所要があるという彼を学士会館に訪れ夕食を共にし久々に胸襟を開いて歓談の数刻を送った。その折り回生病院の玄関に掲げてあったものと思われる横書きの『回生病院』という書が巻いたままで残っているが、よければ君の手を通して東医に献じようとの思いもかけぬ話が出、ありがたく頂戴すると答え、さっそく高山、友田両先生にもその旨を報告し喜んで戴いた。その後彼からの連絡が途絶え、手紙を出しても返事がなく心配していたところ、ほぼ一年たった本年六月はじめ、病気で検査治療の入院を繰り返していたとの電話があり、日をおかず小包が届いた。保存がよくないがという話の通り、書の紙は変色乾燥して所々に破れがあり、半分広げたところでボロボロになる虞れがあるためそつと元に戻し、然るべき表具師に裏打ちを依頼するこゝにした。表の包み紙に副島氏筆とあり、見ることが出来た一部の書体と落款の部分から明治の能書家副島種臣の書であることは確かかのようにである。しつかりした裏打ちが出来、広げて見られるようになれば東医の資料室に納める所存である。

図書館に通って「中濱東一郎日記」を読み、中濱先生と森鷗外そして祖父佐藤^{ツネ}佐が明治十四年卒の東大同期でしかも親しく交わっていたことを知った。祖父は副院長として軍医総監の業務に多忙を極めた進院長に代わり、順天堂医院のすべてを託されていたが、大正五年頃から病を得、大正八年直腸癌で六

十三歳の生涯を終えた。ちょうど東医が生みの苦しみをしていた時期に重なっており、長先生の手記に見るように東医について積極的な意志を表せなかったのは、順天堂を支える責任と自らの病の運命を知っていたためであろうと私は思っている。

長委三美先生の手記を拝見すると、当時の学生たちが新しい学問の場を得るために、あらゆる縁故を通じて医学界、政界、財界等々の有力者に働きかけ、それに対して多くの方々が力強い助言を以って真摯に応えてくださっていたことが分かった。長先生の筆によってそれらの生の言葉を目にすることが出来るのは幸いである。

大正五年に発行された東医学生会雑誌記念號『奮闘之半年』と共にこの『東医の礎』を、昨年創立九十周年を迎え、更にその先の百周年を誇らかに迎えようとしている今こそ、東京医専をそして東京医大の基礎を、熱血の心を以って築いてくれた先輩たちに思いを馳せていくたびも読み返し、改めて建学の精神に立ち帰ることが必要なのではないだろうか。